

また、日本とは不倶戴天の敵であつた中共の毛沢東ですら

「私は彼（日本留学から帰国した教師）が日本について話すのを聴くのが好きでした。彼は音楽と英語を教へてゐました。その歌の一つに日本の『黄海の海戦』といふのがあり、その歌詞の美しい言葉をいまだに一部分覚えてゐます。……当時私は日本の美を知り、また感じとり、このロシアへの勝利の歌に日本の誇りと力といったものを感じたのでした」（エドガー・スノー「中国の赤い星」）

と語つてゐるのを見れば、我が勝利が支那の人々に与へた感銘の深さが知られよう。

支那ばかりではない。インドの王族階級出身でありながら、愛国者であつたビハリ・ボースが、インドの独立運動を志すようになったのも日露戦争に刺激されてのことであつた。彼は日露戦争の翌年に国民会議派の急進派に参加し、武力革命を主張した。彼が後年、日本に亡命し、頭山滿らの計らひで新宿中村屋の相馬愛蔵にかくまはれることになる話は有名である（相馬愛蔵「二商人として」）。

日本の勝利が独立運動家に勇氣と希望を与へ、民族主義の氣運を盛り上げ、運動を推進したのは、この他、フィリピン、ベトナム、ビルマ、インドネシアに於ても同じであつた。

またアジアのみならず、長年ロシアの暴圧に苦しんできたフィンランド、ポーランド、スウェーデンなどの歐洲の国々も、ロシアの敗北を切望し、日本の捷報に歓喜したのであり、かく見れば、日本の勝利は世界史的な意義を有するに至つたと云つても過言ではないだらう。

## 第七節 韓国併合への道

### 欺瞞的な韓国の「中立声明」

日露戦争終結後、世界と極東の政局の潮流を一変させる諸々の事件や事態が、僅か十数年の間に生起した。韓国併合、辛亥革命、そして所謂「二十一カ条」問題、滿洲の鉄道争覇戦、米国の排日移民問題、ロシア革命、シベリア出兵等、第一次歐洲大戰の波紋である。この中で、極東政情に安定をもたらしたのは韓国併合のみ、他は悉く後日の事変及び戦争の遠因となつた。

日露戦争が各国の民族独立運動を勇氣づけ、促進したのとは裏腹に、ひとり韓国が日本に併合される道を辿つたことは一見矛盾した現象のやうではあるが、これは日露戦争が韓国をめぐつて戦はれたことと深く結びついてゐる。そこで、日韓両国民の感情に深い亀裂を残すことになつた韓国併合への過程を略述しよう。

明治三十七年（一九〇四年）一月、日露關係が急迫するや、韓廷は突如、「厳正中立」を密かに列国に打電したが、すでに京城を制圧してゐたロシアはこれを無視した。露兵を撤退させ得ない「中立声明」は一片の空文に過ぎなかつた。

そもそも宣戦布告も交戦行動もないのに、この奇妙な声明が出たのは、ロシア側の戦術によるものであつた。戦争となれば、日本が朝鮮を進路に選ぶことは明白だつたので、日本軍の朝鮮領土利用を予め封じておかうとして、ロシア側から知恵をつけられ、朝鮮政府はこのやうな早まつた中立声明を發したのだと云はれてゐる。その上、こ

の「中立宣言」が甚だ欺瞞的なものであることが判明した。と云ふのは、「中立宣言」の数日後、日本側は黄海で、ロシア軍の行動を旅順に要請する手紙を携行する朝鮮人を乗せた小船を拿捕したのである。しかも驚くべし、その手紙の発信者は「中立宣言」を声明した当の大臣であつた。

これによつて、朝鮮には中立の意思など微塵もないことが物的証拠によつて立証されたのである（H・B・ハルバート「朝鮮亡滅ノ古き朝鮮の終幕」）。

当時在韓のジャーナリストであつたカナダ人F・A・マッケンジーは、日露開戦の直前、宰相の李谷翊に面談し、もし朝鮮が滅亡から救はれようとするなら、改革が必要であると強調したところ、李は即座に朝鮮は安全である、なぜなら我々の独立は欧米諸国によつて保証されてゐるから、と答へたと云ふ。

これに対してマッケンジーは「力によつて裏づけられてゐない条約は無意味であることをあなたは理解してゐない。尊重されるべき条約を望むなら、それに応じた生活をしなければならぬ。改革がなされなければ滅亡しかない」と強調した。すると宰相は「他国が何をしようとする問題ではない。我々はいま中立であるから、中立の尊重を要請する声明を出した」と述べたので、マッケンジーが「もしあなたが自衛しないならば、彼等は何のためにあなた方を守ってくれるだらうか」と質問したところ、宰相は「我々はアメリカと約束ができてゐる。アメリカは、いかなる事態が発生しても、我々の友人である」と固執したと云ふ。そして、このやうな彼の見解は動くことがなかつた、とマッケンジーは記してゐる（「朝鮮の自由のための闘ひ」）。

欧米に依存して、自国の独立のために一指をも動かさうとせぬ他力本願の朝鮮の姿を活写した一節と云へよう。

#### 日韓議定書の意味

二月、我国が対露開戦勢頭へつちうに先勝するや、韓国は俄かに態度を親露から親日に一変させ、ここに日韓議定書が結

ばれた。

右議定書は（一）韓国は施政改善に関して日本の忠告を容れること、（二）韓国の危機に際して日本は軍事上必要の地点を収用できる——等を骨子とした。これは従来の日韓関係を一変し、明確に保護への第一歩を印した点で頗る重要な意義を有した。

斯くして併合への歴史的過程は日露開戦を契機として始り、戦争と共に進行して行つた。韓国の不安定な政情が日露戦争を誘発し、その戦争が韓国併合を促進するといふ、何とも因果な歴史的運命にこの国は呑み込まれて行つたのである。

有事に於て日本が韓国領土を軍事使用することを認めた日韓議定書は、確かに韓国の主権の一部を侵害するものである。

だが試みに思へ。もしこの議定書がなければ、我国は朝鮮半島から満洲へ軍を進めることはできず、対露戦争の遂行は不可能だつたであらう。日露戦争は日本ではなく、ロシアの勝利に終つてゐたに違ひない。開戦に先立つ日露交渉でロシア側が日本による韓国領土の軍略的使用に反対した（既述）理由も、また韓国を使噓しやうして「中立宣言」を出させた理由も、実はここにあつたのだ。それ故、かう云ふことは許されるかも知れない。なるほど日韓議定書が日本による保護化への道を開いたことは事実であるが、それが同時に韓国をロシアの永久支配から救ひ出す結果にもなつたのであると——。歴史を深く見つめるならば、韓国の本當の悲劇は、この国が漸く日露開戦するに及んで親日に転じた事実の中にあることが分かるのではあるまいか。

#### 悪貨の追放——施政改善第一弾

議定書調印から半歳を経た明治三十七年八月、第一次日韓協約が結ばれ、韓国政府は日本人一名を財政顧問とし

て、また日本政府の推薦する外国人一名を外交顧問として採用することになった。議定書にある「施政改善」の第一弾である。

韓国政府財政顧問には大蔵省主税局長を長年勤めた目賀田種太郎が就任した。目賀田は大蔵省で鍛へた手腕を揮つて紊乱した朝鮮の財政整理に尽力した。彼が先づ着手したのは通貨の改革であつた。

朝鮮では貨幣の濫鑄が甚しく、朝鮮の貨幣は世界の悪貨のうちでも最たるもので、良貨、良い偽造貨、悪い偽造貨、粗悪すぎて暗い所でしか通用しない偽造貨の四つに分類できるとさへ云はれてゐた。目賀田は貨幣濫鑄の弊を除くため竜山と仁川の典園局（造幣局）を閉鎖し、我が第一銀行京城支店をして韓国政府の国庫事務を取扱はせ、同行が朝鮮で発行する銀行券を無制限に通用させる等、非常な決意と苦心で貨幣整理を断行し、世界最悪と云はれた朝鮮の通貨を健全な基盤に置くのに成功した。目賀田の改革は一時的には混乱を伴つたにせよ、長い目で見て朝鮮の国家に益をもたらしたことは認められて然るべきであらう（F・A・マッケンジー「朝鮮の悲劇」）。

### 保護化は東亜安定への道

斯くして韓国の外交と財政は事実上、我國の指導を受けることになつたのだが、この保護化を公平な第三者はどう見たか。米国の著名な外交史家タイラー・デンネットはかう書いてゐる。

「韓国人は、その最近の歴史も駐米外交官達も、ルーズヴェルト大統領の尊敬や称賛の念をひき起すことができなかった。……大統領にとつて、長い間海上に遺棄され、航海に脅威を与へる船にも似た韓国が、今や綱をつけて港に引き入れられ、しつかりと固定されなければならないことは明らかだつたやうに見える」

保護化は東亜政局の安定上、已むを得ぬ結論と見てゐるのだ。

ルーズヴェルト大統領は日本の韓国保護化に何の干渉もしなかつた。それは「韓国は自分を守るために一撃すら与へることができなかつたから」（ヘイ國務長官宛て短信）なのである。英外相ランズダウンもまた「韓国は日本に近きことと、一人で立ちゆく能力なきが故に、日本の監理と保護の下に入らねばならぬ」と書いたが、韓国問題についての世界の共通認識の所在が、これでほぼ推察できるのではあるまいか。

### 一進会の対日協力

必ずしも日本の勝利を信じてゐなかつた韓国政府は首鼠両端を持つる態度を取り、議定書の約にも拘らず、我軍の作戦遂行に対して非協力的であつた。しかしながら、一般韓国民の中には日露戦争に彼等なりの理解を持ち、日本軍に好意を寄せる者も少なからず居たことは事実であり、それはやはり歴史に記録しておくべき事柄だらう。

例へば戦争初期に朝鮮北部を旅行したマッケンジー（前出）は、「どこでも韓国の国民からは日本軍に対する友好的話題ばかりを聞かされた。労働者や農民達も友好的であつた」と書き記してゐる。なぜ韓国民衆は日本軍に対して好意を示したのであらうか。それは日本軍の行動に自制があり、敵対者に対してさへ寛仁であつたからだ、とマッケンジーは云ふ。軍律が厳正で、住民を丁寧で、徴発した食糧にも公正な代価を支払つたため、日本軍は韓国民の心に影響を与へずにはおかなかつたのであると――。

下層階級の人々は、日本が自国の地方官僚の圧政を正してくれるやうにと希望してゐたし、上流階級の人々の多くは、朝鮮の遠大な改革は外国の援助なしには遂行し難いと確信してをり、そのため日本に心を寄せてゐたと云はれる。

親日的な朝鮮人の団体として余りにも有名な一進会が結成されたのも、日露戦争酣の明治三十七年秋であつた。一進会会長には元東学党幹部だつた李容九が推され、会員数は百万と称された。一進会の五大綱領は（一）皇室の尊栄、（二）人民の生命財産の安固、（三）施政の改善、（四）財政・軍政の整理、（五）日本軍への積極的協力

であつた。

李容九は日露戦争を、ロシアに代表される西欧侵略勢力との決戦とみなし、日韓軍事同盟でロシアの侵略を阻止してアジアを復興することこそ、朝鮮の運命を開く道と考へたのである。一般には排日空気の濃厚な当時の朝鮮で、このやうに対日協力を声明し実践することは多大の困難を伴ふものであつたが、一進会は敢へて親日へ踏切つたのであつた。

その頃、朝鮮鉄道は釜山から京城までで、我軍が満洲へ兵を送るのに必要な京城から新義州までの鉄道はまだ敷設されなかつた。

韓国政府が非協力的であつたため、我軍は甚だ困窮したのであつたが、この時、一進会が鉄道敷設に立ち上がったのである。また武器弾薬を北方へ輸送するため、一進会は北進隊を組織して日本軍に協力した。これらがいつれも、多大の困難と犠牲を伴ふ事業であつたことは云ふ迄もない。

因に、京義鉄道敷設工事に参加した一進会員は、黄海道、平安南道、平安北道を合せて十五万人に上つた。また北鮮から満洲へ軍需品をチゲ（荷物を背負う道具）で運搬するのに動員された会員は十一万五千人で、この鉄道建設隊と輸送隊を合せると、百万会員のうち二十六、七万人が動員されたことになる。そして鉄道工事の費用は領収雇金二万六千四百十円、会員自費金額十二万二千七百四円といふ数字が残つてをり、大部分が会員の自弁であつたことを窮はせる。

戦争の危険、事故や病氣、多大の出費、加へて反日的朝鮮官民による迫害など、様々の艱難辛苦を冒して日本軍に協力した一進会の捨身の行動は、自国と東亜の復興をこの一戦に賭ける深い信念と憂情あつてこそ、はじめて可能だつたのである（大東国男「李容九の生涯」）。

日韓人の間に、このやうに深い理解と美しい協力関係が見られたにも拘らず、日本軍について渡韓してきた日本人商人達の横暴な行為が朝鮮の人心を離反させ、やがて戦勝が続くにつれて、日本軍自身も韓国民に対して横柄で

抑圧的な態度を取るやうになつて行つた、とマッケンジーは書いてゐる。

戦勝の奢りの他にも、様々な事情があつたに違ひない。だがそれにしても、少なくとも一時期は日本に心底からの理解と協力を吝しまなかつた韓国民を離反せしめたについては、日本人の民族的欠陥と不徳もあつたに違ひなく、筆者はそれを同胞として痛恨するものである。

### 保護条約から併合へ

日露戦争中の明治三十八年（一九〇五年）八月には第二回日英同盟が結ばれ、英国は日本の韓国保護化を承認した。そして日露戦争が日本の勝利に終るや、もはや韓国保護化をさへざる一物とてなかつた。ポーツマス会議を終へた小村にルーズヴェルトは云つた。「将来の禍根を絶滅させるには保護化あるのみ。それが韓国の安寧と東洋平和のため最良の策なるべし」と。ランズダウンの如き「英国は日本の対韓措置に異議なきのみならず、却つて欣然その成就を希望する」とまで云ひ切つた。十一月、第二次日韓協約（韓国保護条約）が調印され、韓国の外交権は日本の掌握するところとなつた。

保護条約の交渉で、高宗は伊藤博文に対し、国家としての形式と対面を残してほしいとの希望を繰返し哀訴したと云はれるが、その胸中たるや、まことに憐れむべきものがある。筆者は保護条約交渉に於て伝へられる伊藤の高圧的態度を快く思ふ者ではないが、叛服常なき韓国外交が極東不安定の一大要因であつたこと、そしてそのために日露戦争が起きたことを考へれば、保護化はやはり歴史の「論理」であつたと云ふ他ないと思ふ。

この国では一事が次の一事を生んでゆく。明治四十年（一九〇七年）、高宗はハーグの万国平和会議に密使を送り、保護条約の無効を訴へんと試みたが失敗した。この事件で高宗は讓位し、皇太子が新帝（李王）に即位した。これと殆ど同時に第三次日韓協約が結ばれ（七月）、我国は韓国内政を掌握し、統監の下に施政改善を行なふこと

「維新」の二字を国是として、政治、司法、産業、教育、衛生などあらゆる面で韓国近代化への施策が強力に推進された。韓国軍隊は皇宮警衛の一大隊を残して解散させられた。

古く遅れた朝鮮社会の急激な改革が、ある面でこの国の人々に犠牲を強ひたことは事実である。翌一九〇八年、統監政治を称賛した元韓国外交顧問ステューヴンス(米国人)は賜環帰国の際、在米韓国人に暗殺された。そして更に、その翌年十月、我が伊藤博文もまた韓国人・安重根のためにハルビン駅頭にて暗殺されるや、韓国併合論が高まり、翌明治四十三年(一九一〇年)八月、韓国は遂に我国に併合され、李氏朝鮮は五百有余年の歴史を閉じたのであった。

### 朝鮮社会の救ひ難い停滞

朝鮮の社会は甚しく後れてゐた。制度文物のみならず、思考様式そのものが停滞してゐたのである。朝鮮国民にとつて、近代化即ち悪なものであつた。朝鮮社会上下に遍く弥漫したこの硬直した思考が、どんなに朝鮮の近代化を妨げる結果になつたかは測り知れないものがある。電車を走らせることさへも、この国では暴動のきつかけになりかねなかつたのだ。

H・N・アレンの編集した『朝鮮近代外交史年表』によれば、一九〇一年八月には線路を枕に眠つてゐた二人の韓国人が轢死する事件があり、一九〇三年十月には電車が韓国人の子供を轢殺したことから京城に騒動が起り、日本の警察官が出勤して騒動を鎮圧した事件、翌一九〇四年一月には朝鮮人労働者が電車に轢殺されたことから再び騒擾が起き、米国防備隊が出勤して鎮圧する事件が発生してゐる。

何故このやうな事件が頻発するのか、再びマッケンジーの『朝鮮の悲劇』によれば――  
京城に電車が開通した時、レールを枕に寝る苦力達によつて電車は屢々妨害を受けたので、車掌達はかういふ者

達を路線から放り出す仕事までするやうになつた。所が数人の高官が、人間にとつて本然的なものである睡眠を妨害することは不法行為であり、電車は軌道上に寝てゐる人が目覚めるまで待つべきである、といふ勅令を發布するやう国王に嘆願書を提出した。

軌道上に寝てゐた者が轢死する事件で暴動が発生、電車が破壊され、運転手がリンチを受けた。逮捕された暴動の指導者達は裁判所で次の如く弁明した。

「我々の父親は次のやうに教へてくれた。お前達は市の門外で眠つてゐる石の亀(京城近辺にある象徴的な古代の記念物)を決して邪魔してはいかんと――もしあの石亀が目覚めるやうなことになるれば國中に一大事が起るだらう。あの電車の物音は石亀を起すことになりかねない。あんなものは我々には要らぬ。電車は停めてしまはないといかん」

右の話は、当時の朝鮮社会の救ひ難い曖昧と前近代性を象徴して余す所がない。「近代的改革」を一方で「日本の侵略」と捉へ、他方「近代化」それ自体を罪悪視する思考様式が韓国社会の発展に大きなマイナス要素として作用したことは否めぬ所であらう。

### 義兵闘争のこと

救国を目的として掲げた民衆の自発的な武力組織を韓国では義兵と呼ぶ。反日的な義兵運動は乙未事変(明治十八年、既述)の直後から起つたが、この義兵運動が激しくなつたのは、明治四十年(一九〇七年)、第三次日韓協約が結ばれ、韓国軍隊が解散させられてからである。解散した軍隊が義兵に合流し、ここに義兵運動は武器と組織を得て、各地で激しい反日抗争を転回するに至つた。

韓国民には独立の意思も用意もなかつた、といふ説に対して、韓国側は義兵闘争のすさまじさを見よと反論す

る。あの激しい義兵のエネルギーを見れば、韓国民を無気力で駄目な民族であるとは云へない筈である——。義兵運動の激しさは認めよう。一九〇七年から日韓併合翌年の一九一一年までの間に、我軍と交戦した義兵は十万人を越え、交戦回数も二、八五〇回、死亡した義兵は一万四千名以上に上る。韓国民特有の所謂「恨のエネルギー」のすさまじさでも云ふべきか。

怨恨や憎悪——韓国の場合には日本に対するものだが——が時として激烈なエネルギーを生み出すことは事実である。だが民衆の怒りのエネルギーだけでは、国家の近代化や独立が達成できるものではない。民衆のエネルギーは、正しい時期に、有力な指導者を得て、正しい方向に健全な形で結集されるのでなければ、決して民族独立の原動力にはなり得ないのである。

義兵闘争のエネルギー——それは結局、日本と日本人に対する憎悪と恨みのエネルギーでしかなかつたのではないか。エネルギーとしては大きなものではあつたが、惜しむらくは適正な時を得なかつたと云へよう。我國の幕末維新運動と比較する時、近代朝鮮の歴史を考察する一つの重要な視点はそこにあるやうな気がする。

#### 独立宣言書の内容

筆者の朝鮮観は酷薄に過ぎるとの謗りを受けるかも知れない。だが筆者は韓国の歴史や民族を殊更に賛美する者でもなければ、蔑視する者でもない。優れたものについては、これを認めるのにいささかも逡巡せぬつもりである。例へば後年の朝鮮独立宣言書（一九一九年三月一日）を読む時、ここに表現された精神の高さと広さに深く心を打たれる。これを世紀の大文字と呼ぶべしとさへ思ふ。そして同時に、これだけの高邁な理想と寛大な精神を有する朝鮮民族が、もつと早い時期に、その精神の活力を独立へ向けて集中發揮し得なかつたことを痛惜する他ないのである。

#### 痛恨の悲劇

日露開戦以後、韓国が日本に併合される迄の過程を駆け足で辿つた。韓民族にとつて、それは慟天哭地すべき哀史であり、それを日本の「侵略」と受け止めるも蓋し自然な感情であらう。筆者自身、傲然たる我國当事者の前に、せめて国家の形式なりとも残され度しと哀願する韓帝の姿を想像する時、その祖国を愛惜する心情に血が激してくるのを如何ともし難い。そして我國が、この隣邦に強硬武断の策を取らねばならなかつたことを悲しむ。

だが同時に、日本のためにも弁ずる所なければならぬ。我國は他国に先立つて韓国を独立国家と認めたにも拘らず、この国は独立し得なかつた。その結果、我國は二度、国運を賭して戦つた。我國は三たび戦ふことを欲しなかつたが故に、空名にしか過ぎない独立を取消し、この国を併合したのである。

優勝劣敗の苛酷な原則が支配する世界で、日本民族が生き残る途は他になかつたのだと筆者は考へる。併合は痛恨の悲劇だつたが、これによつて初めて東亜の政局が安定したことも掩ふべからざる事実なのであつた。